

MUSEUM

ミュージアム・アイズ

EYES

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

Vol. 61

2013

特集

特別展 天平の華 東大寺と国分寺

Contents

- 延岡藩内藤家文書交流事業 — 作文コンテスト&講演会
- 展示&リサーチ — 神代雄一郎が構想したデザイン・サーヴェイ
- 市民レクチャー — 縄文の貝輪と身体装飾
- 学芸研究室から — 内藤家文書研究の促進及び旧領延岡市との交流事業
～「譜代大名内藤家文書の素顔」展から～
- 韓国公州市石壮里博物館開催の特別展に岩宿遺跡出土石器を出品しました
- 収蔵室から — 山陰の民窯と民藝運動
 - 南山大学協定通信/図書室から
 - 統計/団体見学の記録/M2 カタログ
 - 博物館友の会から — 友の会新分科会
'倭国から大和'を学ぶ会'が発足しました!

(右) 東大寺創建期軒丸瓦(前場幸治コレクション当館蔵)
(左) 上総国分寺七重塔模型(市原市教育委員会提供)

天平の華 東大寺と国分寺



「国分寺」と彫り込まれた工具でつくられた下野国分寺（栃木県）の瓦。前場コレクション。（当館蔵）

■趣旨

東大寺と国分寺の造営は、膨大なエネルギーが投入された天平の一大国家事業でした。近年の発掘調査の進展や、瓦・木簡・墨書土器をはじめとした考古資料の分析、また文献資料の研究によりその姿が徐々に明らかになってきています。今回の特別展では、明治大学博物館が所蔵する国内屈指の個人瓦コレクションである前場幸治資料から厳選した、東大寺と武蔵・下野・上総・下総・常陸の各国分寺・地方寺院の瓦約60点のほか、東大寺境内出土の創建期の瓦や大仏鑄造関連資料、国内でも数少ない具体的な国分寺の造営状況を記した文字資料である安芸国分寺出土木簡や但馬国分寺出土木簡、関東で随一の規模を誇った上総国分寺出土資料など全国20か所の機関が所蔵する天平期の寺院のありかたを示す約100点の貴重な資料をあわせて公開します。墨書土器や文字瓦の集成と研究で日本のパイオニアとなっている明治大学古代学研究所の協力のもと、奈良時代初頭の東大寺・国分寺造営の実像と国分寺が地方の寺院造営に与えた影響について、最新の調査・研究成果から描き出していきます。

東大寺と国分寺の造営は、膨大なエネルギーが投入された天平の一大国家事業でした。近年の発掘調査の進展や、瓦・木簡・墨書土器をはじめとした考古資料の分析、また文献資料の研究によりその姿が徐々に明らかになってきています。今回の特別展では、明治大学博物館が所蔵する国内屈指の個人瓦コレクションである前場幸治資料から厳選した、東大寺と武蔵・下野・上総・下総・常陸の各国分寺・地方寺院の瓦約60点のほか、東大寺境内出土の創建期の瓦や大仏鑄造関連資料、国内でも数少ない具体的な国分寺の造営状況を記した文字資料である安芸国分寺出土木簡や但馬国分寺出土木簡、関東で随一の規模を誇った上総国分寺出土資料など全国20か所の機関が所蔵する天平期の寺院のありかたを示す約100点の貴重な資料をあわせて公開します。墨書土器や文字瓦の集成と研究で日本のパイオニアとなっている明治大学古代学研究所の協力のもと、奈良時代初頭の東大寺・国分寺造営の実像と国分寺が地方の寺院造営に与えた影響について、最新の調査・研究成果から描き出していきます。

■展示構成

- 1 **プロローグ 東大寺と国分寺の建立・天平の光と影**：東大寺と国分寺の創建の目的と、その時代背景を東アジアの状況も踏まえて解説します。
- 2 **護国の祈りと七重塔**：国分寺建立の目的について、国分寺建立の根本經典であった金光明経と国分寺のシンボルとなった七重塔から解説します。
- 3 **大仏造営と東大寺**：大仏造営と東大寺創建は、当時の王権が抱えていたさまざまな問題が反映されています。東大寺創建に至る経緯を追いながら、王権の側からみた当時の社会を捉えます。

4 **国分寺の創建とその諸相**：発掘調査でわかった国分寺の実態を示し、国分寺が建立されたことによっておこった地域の変化を取り上げます。

- ① **国分寺造営の経緯**：国分寺造営がどのような経緯で成し遂げられたか、安芸国分寺の木簡を用いて解説します。
- ② **国分寺の構造と景観**：国分寺はどのような堂塔や施設から



安芸国分寺（広島県）から出土した「天平勝寶二年」と記された木簡。地方の国分寺の創建時期を考える上で貴重な資料（写真：東広島市教育委員会提供）



東大寺境内から出土した創建期の銅製品の鑄造を示す資料（東大寺境内第98次調査出土資料。左上から時計回りにふいご、鑄型、とりべ、銅滓、坩堝の各破片）。現境内で建物の装飾等を製作していたことがわかる（写真：奈良県立橿原考古学研究所提供）

成り立っていたのかを、下野・上総・下総・安芸国分寺の例から解説します。

③国分寺創建と地域社会：国分寺の創建によって変貌した地域社会について、国府や郡家などの地方官衙との関わり、地域の開発や仏教のかかわりを下野・下総・常陸国の例から解説します。

④国分寺造営への負担：国分寺造営で各地域がどのように負担を負ったのか、おもに武蔵国分寺の文字瓦を用いて解説します。

5 エピローグ 天平の華 東大寺と国分寺：東大寺と国分寺造営を中央・地方の視点を交えて捉え、その意義を日本の歴史に即して考えます。



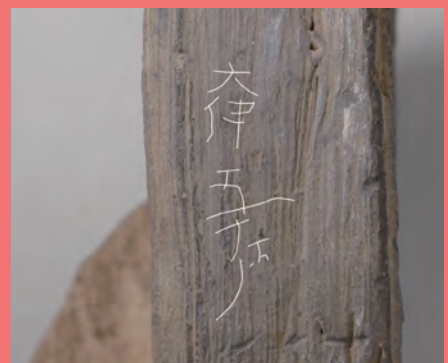
常陸国分寺軒丸瓦(7105型式)。前場コレクション(当館蔵)

ぜん ば ゆき じ 前場幸治コレクションとは

2010年2月、瓦研究者として著名な前場幸治氏から、古代の瓦を中心とした約1万点にのぼる膨大な資料が明治大学に寄贈されました。前場工務店代表取締役で親子三代にわたる大工・棟梁でもあった前場氏は、本業にかかわる大工道具のコレクションを厚木市の前場資料館で公開するとともに、瓦資料の収集と研究を精力的に行いました。日本各地の国分寺の瓦をはじめ、文字が記された記銘文瓦や中国・朝鮮の瓦、また中近世・近代の瓦や瓦道具なども含まれた総合的なコレクションは、日本の瓦史が凝縮されていると言っても過言ではありません。なかでも、小田原市千代台廃寺の「大伴五十戸」記銘軒丸瓦は、律令で規定された古代の地方行政単位の里に相当する「サト」の表記である「五十戸」という文字が記されており、古代の瓦生産の単位を示す全国でも数少ない貴重な資料です。また、研究の成果である『古瓦を追って—相模国分寺、千代台廃寺考—』などの著書は、瓦研究の重要な基礎資料として知られています。明治大学博物館では3年間にわたってコレクションの整理と調査を進めてきました。今回の展覧会は、その成果報告の一部を兼ねています。



前場幸治氏(1933-2011)



「大伴五十戸」記銘軒丸瓦
(千代台廃寺、前場コレクション。山路直充氏撮影)

開催概要

主催：明治大学博物館 共催：明治大学古代学研究所

会期：2013年10月19日(土)～12月12日(木)

会場：明治大学博物館特別展示室(明治大学駿河台キャンパス アカデミーコモン地下1階)

入場料：300円(高校生以下の生徒児童、身体障害者手帳・愛の手帳をお持ちの方、明治大学学生・教職員、

明治大学博物館友の会会員、明治大学カード会員、明治大学リパティ・アカデミー会員は会員証等の提示で無料)

「天平の華 東大寺と国分寺」関連事業

① 開幕記念講演「東大寺と国分寺」 10月18日(金) 15:00～16:30

会場：明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント グローバルホール

講師：栄原永遠男（東大寺総合文化センター・東大寺史研究所所長）

定員：120名（先着順）、参加費無料、申し込み不要

② 公開シンポジウム「東アジアからみた東大寺と国分寺」 11月4日(月・祝) 11:00～16:00

会場：明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント グローバルホール

東アジアの視点から、東大寺と国分寺の造営を考察します。

開会挨拶 風間信隆（明治大学博物館長）

11:00～11:40 「時代背景」吉村武彦（明治大学・明治大学古代学研究所所長）

11:40～13:00 昼休憩・展示観覧 ※12:30～13:00 ギャラリートーク

13:00～13:40 「東大寺」吉川真司（京都大学）

13:40～14:20 「唐」向井佑介（京都府立大学）

14:20～14:30 休憩

14:30～15:10 「新羅」清水昭博（帝塚山大学）

15:10～15:50 「国分寺」山路直充（市立市川考古博物館）

閉会挨拶 吉村武彦

定員：120名（先着順）、参加費無料、申し込み不要

※参加者は、当日無料で特別展を観覧できます。当日中は再入場可能

③ ギャラリートーク 隔週金曜日 13:00～13:30 開催

会場：明治大学博物館 特別展示室

解説：鈴木知子・森本尚子（明治大学博物館研究調査員）

参加費無料、申し込み不要

開催日：10月25日、11月8日、11月22日、12月6日

④ 明治大学博物館友の会主催 特別展「天平の華 東大寺と国分寺」関連 バス見学会

日時：11月10日(日) 集合9:00 JR大宮駅（貸切バス乗車）／解散17:00(予定) JR大宮駅

主な見学場所：しもつけ風土記の丘資料館—下野国分寺・国分尼寺跡—下野薬師寺跡（天平の丘公園）

参加費用：6,000円（参加予定人数によって変動します）

定員：40名（先着順）*定員を超える申込があった場合お断りする場合がありますのでご了承ください。

申込方法：明治大学博物館ホームページ（http://www.meiji.ac.jp/museum/company/tomonokai_event.html#title1-6-1）
をご参照ください。メール、往復はがき（FAX不可）申込〆切 10月21日(月)

お問合せ 明治大学博物館事務室 TEL:03-3296-4448（平日・土曜 10:00～17:00）

作文コンテスト&講演会

明治大学博物館では、日向国延岡で幕末を迎えた譜代大名内藤家文書を所蔵しています。博物館では、内藤家文書の調査・研究をさらに推進するとともにこれまでの成果を内藤家旧領地に相当する地域へ還元する事を目的として、2011年度から研究促進5ヶ年および交流事業3ヶ年の「内藤家文書研究の促進及び旧領延岡市との交流事業」を行っています。2013年度は交流事業の最終年となる3年目です。本年も、「明治大学で宮崎の歴史を学ぼう作文コンテスト」と延岡市での明治大学博物館・延岡市教育委員会共催講演会を行いました。

作文コンテストは、宮崎県延岡市の小・中学生、宮崎県内の高校生を対象に郷土の歴史についての作文を募集し、本年は139件の応募作品から厳正な審査を経て、受賞者15人が決定しました。8月2日に、小学生・中学生・高校生各部門の優秀賞1人・入選1人、計6人を明治大学に招待し、博物館で受賞式を行いました。受賞式では博物館友の会の会員が見守る中、風間信隆館長から6人に賞状と記念品が手渡され、優秀賞受賞者が元気に作文を読み上げました。

さらに、翌3日に、延岡市内藤記念館にて、明治大学博物館・延岡市教育委員会共催歴史講演会が行われました。講演会では、内藤家文書近代史料の整理を指揮している明治大学文学部落合弘樹教授が、「明治維新と延岡土族」の演題で西南戦争と延岡との関わりを報告し、新たになった地元の歴史に約70名の聴講者が聞き入りました。

作文コンテスト受賞者一覧

■ 高校生の部

- 優秀賞 宮崎県立飯野高等学校 3年 出石英里子
「タノカンサア～地域に豊作をもたらす山の神～」
- 入選 宮崎県立高千穂高等学校 3年 川崎瑛
「高千穂古武道棒術」
- 佳作 宮崎県立延岡星雲高等学校 3年 西村菜都子 「ふるさとの音」
- 佳作 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校 5年 宮寄麻由香
「自然に刻まれた時の流れ」
- 佳作 宮崎県立宮崎南高等学校 2年 高橋藍
「宮崎から巣立った孤児の父」

■ 中学生の部

- 優秀賞 延岡市立恒富中学校 3年 浅井優香
「のぼり猿から伝わる思い」
- 入選 延岡市立岡富中学校 2年 末廣いのり 「レンガ塀に見守られて」
- 佳作 延岡市恒富中学校 1年 菊池笑 「日向御前と愛宕山」
- 佳作 学校法人延岡学園尚学館中学校 2年 下窪紀稀
「今に続く能楽」
- 佳作 延岡市立南中学校 2年 山下詩織
「小林氏によって守られた緑豊かな延岡」

■ 小学校の部

- 優秀賞 延岡市立旭小学校 6年 下窪智裕 「延岡の能楽について」
- 入選 延岡市立東小学校 4年 兒崎希 「牧水とわたし達のつながり」
- 佳作 延岡市立土々呂小学校 6年 堀越妃那 「延岡ってすごいんだ！」
- 佳作 学校法人延岡学園尚学館小学校 4年 藤島莉那 「大好きな延岡市」
- 佳作 延岡市立川島小学校 5年 牧野朱莉 「春の大イベント 今山大師祭り」



作文コンテスト受賞式



歴史講演会

神代雄一郎が構想したデザイン・サーヴェイ

青井 哲人 (明治大学理工学部建築学科准教授)

1. 堀口捨己と神代雄一郎

理工学部建築学科では、2013年4月20日(土)から5月19日(日)まで、明治大学博物館特別展示室にて、「建築家とは何か：堀口捨己・神代雄一郎展」を開催した(★1)。本学建築学科の創立時(1949年、当時は工学部)からの教員である堀口捨己(1895～1984)、神代雄一郎(1922～2000)を今日的に再評価するためのささやかな回顧展であった。関連してギャラリー・トークや記念シンポジウム(★2)も行った。

本稿では、この展覧会に出展した資料群のうち、筆者が受入・整理を担当している「明大建築アーカイブ」の神代雄一郎資料、なかでもデザイン・サーヴェイ関連の資料群にフォーカスを絞って、私たちがどんな研究を進めようとしているかを紹介してみたいと思う。

2. 建築家と社会

いま建築家と社会との関係が問い直されつつある。たとえば東京のような大都市で、建築家は本当に社会の成熟の方向性を見据

え、地に足の着いた仕事をなしえているだろうか。東日本大震災の被災地で、建築家に何ができているだろうか。社会に対する建築家の歴史的責任とは何だろうか。

神代雄一郎は、同様の問いに半世紀ほど前に向き合いはじめた。日本社会が戦後復興から高度成長へと躍動していくなかで、「建築家」が暴力的な都市開発に無批判に加担しているのではないかという疑問あるいは不信任感を募らせたのである。戦後まもなくの数年間、まだ建設の槌音が響かない頃、建築家たちはどれほどの熱意をもって「人民」の生活の再建に果たすべき自らの役割を論じあったことか。彼らはそれを忘れてしまったのか。こうした問いが、その後展開された神代の活動と発言の、すべての基盤にあったといつてよい。

なかでも重要なのが、1967年に神代研究室として着手したデザイン・サーヴェイである。日本の歴史的なコミュニティの構造を調べることで、地域社会に密着したまちづくりや建築デザインの指針を示そうと考えたのである。それはまず文字どおり「調査」であり、また学生との共同作業を通じた実地の「教育」であり、獲得されるべき意匠論の「方法」の探求であり、また建築や文明への「批評」でもあった。

3. デザイン・サーヴェイのはじまり

1965年から翌年にかけて、神代は在外研究員としてアメリカ東部を精力的に廻り、民主主義の基盤としてのコミュニティの具体的な姿にふれ、また、彼地の大学で一般的に行われていた都市デザイン教育が対象地区のサーヴェイを組み込んでいたことにも大いに触発された。それが、帰国後ただちにデザイン・サーヴェイに着手した直接の契機だった。

たまたま、神代の滞米中、1965年8月にオレゴン大学が金沢で行ったサーヴェイがきっかけとなって、60年代後半から70年代にかけて、日本の多くの大学研究室が集落を調査して雑誌で発表しようという、デザイン・サーヴェイの黄金時代を迎えるので、神代研究室のサーヴェイもそうした流行のひとつと捉えられがちだ。しかし、多くの調査が伝統的集落の美しさや空間経験の魅力に注目したのに対して、神代は社会学的・人類学的な観点からコミュニティの結合構造を把握し、それが集落の空間の成り立ちとどう結び付いているかを示そうとした。だからといって、神代がデザインよりも学術を重視したということではな

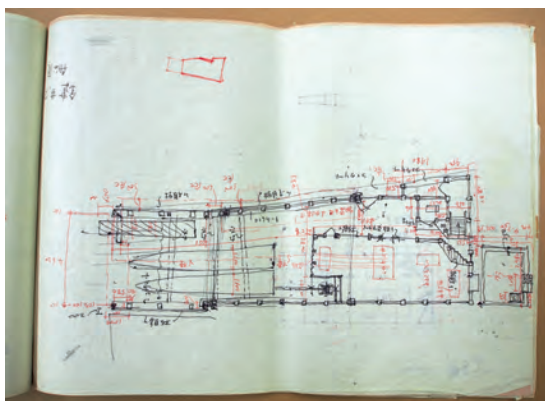


図1 デザイン・サーヴェイ丹後伊根(1968) 実測野帳(平面図)

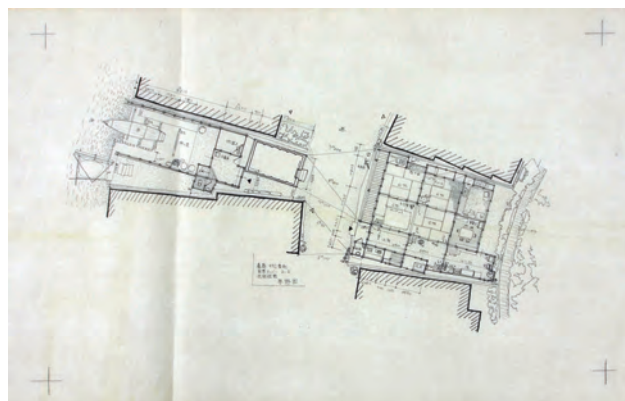


図2 デザイン・サーヴェイ丹後伊根(1968) 野帳清書 1:100(平面図)



図3 デザイン・サーヴェイ丹後伊根(1968)連続平面図 1:100 (一部)

い。デザインの根拠はコミュニティの構造を踏まえるところにしか捉えられないと考えたのである。

1967年から1972年までの一連の初期サーヴェイは、瀬戸内女木島、丹後伊根、宍岐勝本浦、菅島、土佐沖の島、津軽十三、というように、日本列島の辺境に残る漁村集落を対象とした。コミュニティと空間の関係が、漁村ならば原初的なモデルとして抽出できると考えたからだ。

彼らは、集落全体にわたってほぼすべての家屋の平面図をとるという膨大な作業を行い、そのなかに生産組織や祭祀組織を通してコミュニティの単位と結合関係、それを支える特徴的な空間などを読み取って、集落構造をモデル化していった。一方で神代は、コミュニティの最適規模という問題に深い関心を寄せた。資本主義経済が求める都市開発が、人間どうしの結合を無視したスケールに肥大化していくことへの批判

と、それに対抗できるデザイン論の根拠を求めたのである。

今回の展覧会では、この時期のサーヴェイの成果として、雑誌発表用に大判トレーシング・ペーパーに鉛筆やペンで描かれた多様な集落図と、その原図および調査時の野帳などを中心的に展示した。

4. 漁村から都市へ ～知られざる神代の構想

1970年代に入ると、デザイン・サーヴェイで掴んだ知見をもとに、神代は活発に批判の筆をとりはじめる。「コミュニティの崩壊」を告発し、建築家の地域社会への参画を呼びかけただけでなく、1974年には大都市における「巨大建築」を批判する文章を発表し、巨大開発に加担する建築家たちを批判した。これが「巨大建築論争」と

呼ばれる論争に発展するのだが、論争とは名ばかりで、神代は一方的な攻撃を浴びて孤立し、批評の筆を折ることになってしまう(★3)。

神代の「巨大建築」批判はいくぶんナイーブに過ぎ、また漁村コミュニティの研究成果をもって大都市の開発にかかわる建築家を批判する論法も、たとえ彼なりの直観に裏打ちされていたとはいえ、飛躍がなかったとは言いがたい。しかし、一般にはほとんど知られていないが、神代はその後、漁村から都市へとサーヴェイの対象を拡げていく構想をもっており、実際に70年代後半にかけていくつかの下町コミュニティのサーヴェイを実施している。

「明大建築アーカイブ」神代資料は、神代が自宅に所蔵していた資料を、研究室OBのご協力により建築学科として譲り受けたものであり、神代の思考の全貌を知る上できわめて重要な、多岐にわたる資料群となっている。デザイン・サーヴェイに関連するものに限っても、数百枚の図面資料のみならず、神代がサーヴェイをはじめた経緯、サーヴェイの現場での行動や省察、そしてその後の都市への展開の模索を物語る、断片的な資料が豊富に含まれている。

神代雄一郎という先達が現代を生きる私たちにとって意義ある羅針盤になるためには、これら資料によって、まだ知られていない彼の「構想」の全貌が解き明かされる必要がある。そのためには資料の整理ならびに公開に向けた一連の作業がきわめて重要であるが、これは途についたばかりである。じっくり、しっかり、責任を果たしていきたい。

注

★1 http://meiji-architecture.net/event/2013_horiguchi+kojiro.php

★2 10+1website 2013年6月号 (<http://10plus1.jp/monthly/2013/06/>)

★3 青井哲人「戦後建築論争史の見取り図：とくに「巨大建築論争」の再読のために」(『建築雑誌』2011年2月号 特集「建築論争の所在」)



図4 デザイン・サーヴェイ丹後伊根(1968)集落景観(アイソメ図)



図5 デザイン・サーヴェイ丹後伊根(1968)祭礼と広場の概念図

縄文の貝輪と身体装飾

阿部 芳郎 (明治大学文学部教授)

河端 歩 (明治大学文学部史学地理学科考古学専攻 1年)

星 真朱 (明治大学文学部史学地理学科考古学専攻 1年)

はじめに

日本先史文化研究所では、資源利用という観点から縄文文化の特質を解明する研究を推進している。その成果の一部は2013年2月に明大博物館で『下郷コレクションと霞ヶ浦の貝塚』と題した企画展で公開した。人類が自然物を資源として認識するのは、人類社会の必然性からであり、たとえ採集社会であっても、身の回りの環境だけが彼らの利用できる資源を決定したわけではない。

たとえば縄文時代ではヒスイや黒曜石など100km以上も離れた地域の資源を自在に入手していることがわかっている。彼らにも強い欲求があり、それは高い山、深い海を乗り越える原動力ともなったに違いない。

ここでは展示のテーマの1つとして取り上げ、現在も研究を続けている縄文時代の貝製腕輪(貝輪)の研究の一部を紹介する。

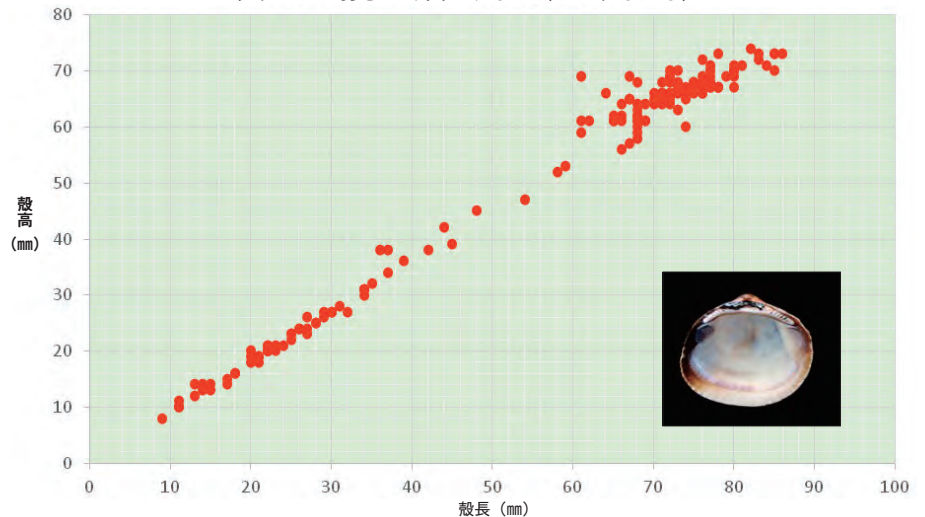
貝輪とは何か

貝輪とは主に二枚貝を素材として作られた腕輪である。二枚貝以外では巻貝のオオツタノハやアカニシなどを素材とし



ベンケイガイ製貝輪の未完成品 (千葉県銚子市余山貝塚)

グラフ 1. 打ち上げ貝のサイズ (ベンケイガイ)



たものもある。縄文時代後期中ごろ(今から約3500年前)になるとベンケイガイという二枚貝を主体とした貝輪が急増し、遺跡から出土する数も増える。

これまでの縄文時代人骨の発見例の中で、貝輪を腕にしていた人骨は、ごくわずかな例外を除いては女性である。したがって、貝輪は女性が身に着けた装身具であったことがわかる。では、貝輪作りにおいて自然物の貝はどのようにして資源化されたのか。さらには女性社会の中で、どのような意味をもっていたのだろうか。

しばしここから先の解説は、この研究に参加してくれている学生たちにお任せすることにしよう。(阿部)

貝という資源の利用方法

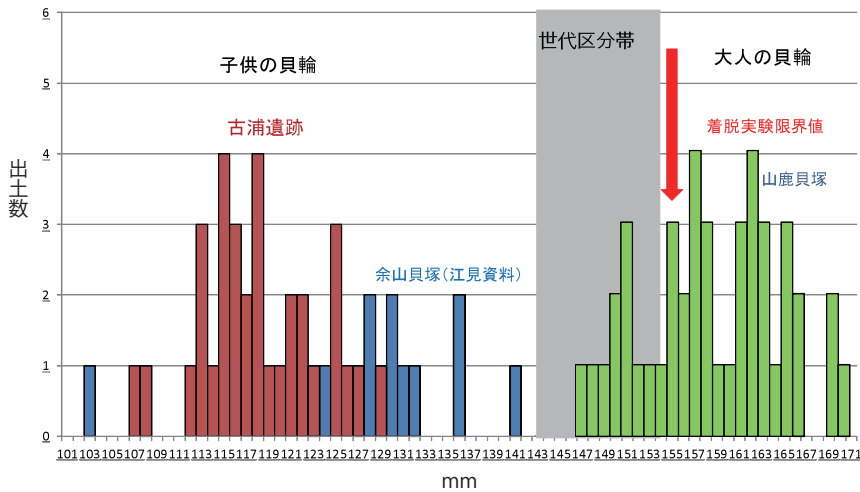
貝輪の素材とされたベンケイガイとサトウガイは、海辺ならばどこでも拾えるというものではない。彼らはどのような浜で、どのように貝を選んだのか。この

事実を知るためには、実際の海で貝の産状を調べる必要がある。

これまでの貝輪の研究は、遺跡から出土した貝輪自体の分析に限定されたものが多かった。そこで、私たちは縄文人が資源として貝をどのように利用したのかということを知るために、実際に海辺で貝を採集し、出土した貝輪との比較を行った。

調査を行った千葉県安房鴨川では、貝輪の材料となるベンケイガイとサトウガイの産状が見られ、ベンケイガイの大きさ(貝殻の横幅を殻長・縦幅を殻高と呼ぶ)で比較すると、殻長は9mm~86mmと、幼貝から成貝まで大小様々なものがあつた(グラフ1)。それに対し、千葉県余山貝塚で出土した貝輪の殻長は67mm~91mmで、福岡県山鹿貝塚で出土した女性人骨の腕に装着された14個の腕輪は61mm~76mmの成貝であつた。今回の調査により縄文人は素材貝のサイズの必要に応じて選択をしていたことが明らかになった。

グラフ 2. 子供と大人の貝輪の内周長



貝輪と縄文社会

今回の研究では、縄文時代の後・晩期に大人と子供の女性が身に付ける複数のサイズの貝輪が存在することがわかった。縄文後期から晩期の時期、女性たちは子供から大人へと多世代にわたり腕輪を付けて、自分たちが女性であることを表示する場面があったのだろう。これは個人のおしゃれだけにとどまらず、社会的な意味を内在させているのであろう。だからこそ、この時期になると日本の各地の海際に大量の貝輪を作った遺跡が出現するのだ。

私たちはこうした現象を「着装の多世代化」というキーワードを用いながら、検討を始めている。

ちょうど、後晩期になると同じように多量化する土製耳飾もこの時期の女性装飾品の1つで、大きさや装飾にはさまざまなバラエティーがあることが知られている。

また、女性の中には、他の女性よりも多くの貝輪を着けている人がいる。彼女は社会の中でいったいどのような立場の女性だったのか。そこに女性史からみた縄文社会がある。興味は深まるばかりである。



研究所ではこうした問題について、入学してまだ間もない女子学生たちが挑んでいる。きっとその先には女性たちの長い歴史世界が広がっているに違いない。(阿部)

貝殻の厚さについて見てみると、安房鴨川では薄いものも厚いものもあり個体差が大きい。実験製作では薄いものが失敗する率は低いが、なぜか遺跡から出土した貝輪は厚い貝殻を使用しているものが圧倒的に多い。その理由はまだはっきりとは解明されていないが、製品としての貝輪の形状に関係しているのであろう。このことから縄文人による選択性が見られる。

また、打ち上げ貝の表面には虫食いや波浪による磨滅痕があり、出土した貝輪にもそれらが見受けられることから、縄文人が生きた貝ではなく打ち上げ貝を利用したことがわかる。

この様に、海辺での貝の産状は資源としての貝の利用形態を教えてください、遺物の材料となる資源には環境と人間の選択が関連していることが実感できる。実際に海辺にサンプルを採りに行き、その実態を把握することが大切であるということを変更して学んだ。(河端)

着装貝輪からわかること

今回の研究では、福岡県山鹿貝塚から出土したおよそ30歳の女性とされる2



福岡県山鹿貝塚の貝輪着装人骨

体の人骨(2号、4号人骨)が装着していた貝輪の内周長(貝輪の内側の円周)を計測した(グラフ2)。

私たちはこれまでの研究の中で、人骨に着装された貝輪の内周長や、実験製作した貝輪の着脱実験を通して、貝輪の内周長が155mmのものが大人の着脱実験限界値であることを推測した。

一方、土器の中に埋納された子供の貝輪と考えられる千葉県余山貝塚の貝輪や、弥生時代前期の子供に着装された貝輪と比較してみると、その間には空白があることが分かった。この数値上の空白をまずは大人と子供の世代を区分する世代区分帯(140mm前半～150mm前半)として考えたのである。その中で今回の山鹿貝塚の分析において2号、4号人骨の貝輪がその世代区分帯にどのように分布するかを調べた。計測には44個の貝輪を使用した。2体の貝輪の内周長は最小で147.5mm、最大で178.5mmであった。これらの数値は、先述の世代区分帯を大きく逸脱するものでなく、その仮説は妥当であったことが分かった。

また、2号と4号を比較すると、4号人骨の貝輪の方が全体的に内周長が大きかったことから大人の中でも、個人の体型に合った貝輪が製作されていたことも推察される。

しかし、貝輪の大きさからだけでは着装者がどのような人であったかを判断するのは難しい。この問題にどうアプローチしていくのか、今後は墓域における埋葬状態や、貝輪の着脱状態などを考察していく必要がある。(星)

内藤家文書研究の促進及び旧領延岡市との交流事業 ～「譜代大名内藤家文書の素顔」展から～

2011年度から行われている「内藤家文書研究の促進及び旧領延岡市との交流事業」の調査成果の発表を兼ねて、明治大学博物館では2013年7月6日から8月9日に「譜代大名内藤家文書の素顔」展を開催した(写真1,2)。展示会は僅か1ヶ月という短い期間であったから、展示会の内容を抜粋して、本事業の成果をここに報告したい。

内藤家は、延享四(1747)年までは陸奥国磐城平(現福島県いわき市)、それ以後は日向国延岡(現宮崎県延岡市)に城を持った七万石の譜代大名で、明治大学が内藤家や内藤藩領の歴史を伝える内藤家文書を受け入れて、今年で五〇年目を迎える。藩主の事、藩政の事、領民との関係、文芸・・・内藤家文書は様々な歴史を語る。いわば様々な「顔」を持つ内藤家文書だが、今回は多彩な顔の中から、幕府と内藤家の関係、特に軍事的な側面と、幕府から与えられた所領に関わる側面をとりあ

げ、「近世初期の内藤家」、「内藤家の所領」、「幕末の内藤家」の三部構成で展示を行った。

1. 近世初期の内藤家

内藤家は、三河国碧海郡姫郷の国人領主であった重清の代に松平宗家に服従し家臣化したと考えられている。内藤家文書に残された家譜系図類は内藤家の初代をこの重清の子義清とする。義清は松平信忠、清康に仕え、岡崎五人衆と称した。義清の孫にあたる家長は徳川家康の部将として戦功をあげ、天正一八(1590)年には、徳川家の関東移封に従い、上総国天羽郡二万石を拝領し佐貫城に入る。慶長五(1600)年、関ヶ原の前哨戦となった伏見城の戦いで、家長は子の元長、鳥居元忠、松平家忠らと共に伏見城に籠城し討ち死にする。そして、この伏見城での戦功が、内藤家の大名として成長の基礎となる。家長の子政長は、家長の死後二万石を相続し、慶長七(1602)

年には家長・元長の伏見城の戦功に対して一万石を加増され合計三万石を領する事となった。その続、漸次加増され四万五〇〇〇石の大名に成長してゆく。

内藤家は三河以来の譜代大名ではあるが、幕閣としての働きは殆ど見られず、幕府とのかかわりは、近世初期の軍事的な側面、城請け取りや大坂城代就任に見いだす事が出来る。慶長一九(1614)年に安房国の里見忠義が改易され伯耆国へ配流されると、佐貫城主であった内藤政長は、里見氏の居城館山城の城請け取りをつとめ、城を破壊し制法を沙汰した。さらに、元和六(1620)年、筑後国田中氏が断絶し改易されると、政長は柳川城請け取りの横目をつとめている。政長の子忠興も同様

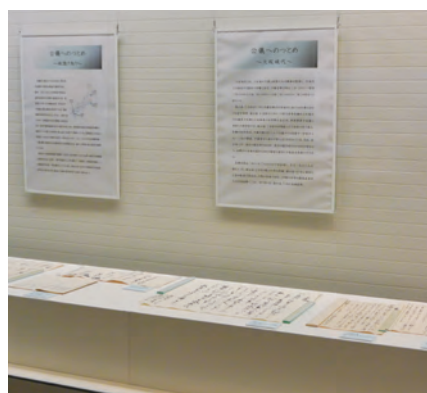


写真1 展示風景



写真2 展示風景 延岡領白杵郡の絵図



図1 内藤家の所領1

の働きをする。寛永四（1627）年会津の蒲生氏が断絶し改易されると、会津・三春の居城召し上げに際して三春城番をつとめ、寛永九（1632）年加藤忠広改易時にも父政長と共に脇城八代城の請け取りをつとめる。さらに、忠興は承応三（1654）年～明暦二（1656）年と万治二（1659）年～万治三（1660）年の二度、大坂城の守護と西国大名の動静を監察し、在坂役人を統括する幕府の役職であるところの大坂城代にも任命されている。

2. 内藤家の所領

内藤家はもともと三河国姫郷の人だが、明治を迎える迄に幾度かの所領移動を経験している。義清の時に松平家から三河国上野城を与えられるが、既述の様に、天正一八（1590）年に上総国天羽郡佐貫城に移動し、元和八（1622）年に加増転封で陸奥国磐城平七万石に所領を移す事になる（図1、絵図1）。

100年以上磐城平を治めた内藤家だが、延享四（1747）年に突然転封を命じられる。内藤政樹陸奥国磐城平七万石、牧野貞通日向国延岡八万石、井上正経陸奥国笠間六万石の三方領知替で、内藤家は延岡へ、牧野家は笠間へ、井上家は磐城平への転封であった。近世の中期ともなると転封に伴う諸手続きは既に定式が確立していた。転封時には、大名

同士が城と領知のやりとりを直接行う訳ではなく、城と領知は一旦幕府に返上され、改めて新しい領主へ与えられる。城は幕府派遣の上使が、領知は幕府の代官が、その仲介役を果たした。内藤家が延享四（1747）年に転封した延岡の領知は、実高八万四九百九石余で、内訳は牧野藩領から引き渡される日向国臼杵郡・宮崎郡、豊後国大分郡・国東郡・速見郡が計高六万四九百九石余、代官岡田庄太夫から引き渡される宮崎郡を中心とした幕領分が二万石であった。内藤家の新たな所領は、延岡城のある臼杵郡（写真2）以外に、宮崎郡（絵図2）と遠方の豊後領の飛び地によって構成されていた（図2）。転封の準備過程で、旧領主牧野家から統治情報を収集していた内藤家は、延岡領の年貢は磐城平領よりすくない上、京大坂長崎の勤め向きも多く遠国の往来は出費が多い事、年貢以外の雑税が多く取り立てがことのほか難しい事などを教えられている。

3. 幕末の内藤家

寛政三（1791）年、延岡藩では、幕府の異国船漂流取り扱いについての法令をうけ、以後幕領の細島港を中心とする海岸防衛体制を取ることになった。文久三（1863）年から元治元（1864）年にわたる異国船渡来時の海防策について、郡方にかかわる事項をまとめた「御軍備覚

書」には、細島砲台設置に関する記録もおさめられている。幕府から警備の強化を命じられた延岡藩が砲台設置場所を検討したところ、既に秋月氏高鍋藩が砲台造築場所として西国筋郡代に了解を得ていた細島崎が適地と判明した為、高鍋藩との交渉の結果、この地は延岡藩の砲台場所として譲られる事になった事などが記されている。

また、「内藤家文書研究の促進及び旧領延岡市との交流事業」で、共同調査を行っている延岡市内藤記念館大浪和弥学芸員によれば、幕末における延岡藩の動向はあまり知られていないが、幕府の瓦解を決定付けたとも言われる二度にわたる幕長戦争に、いずれも幕府軍として出兵していることが内藤家文書に含まれる多くの幕長戦争関係史料により判明するという。幕末期の内藤家の政治的な動きは殆ど研究されていないが、この時期の史料は豊富に残されており、今後この分野での成果が期待される場所である。



絵図1 奥州磐城平御城下之図



絵図2 宮崎之図



図2 内藤家の所領2

韓国公州市石壯里博物館開催の特別展に 岩宿遺跡出土石器（重要文化財）を出品しました

韓国公州市にある石壯里（ソクジャンリ）博物館で7月15日に開幕した「日本旧石器の始まり“岩宿”」特別展に当館所蔵の国指定重要文化財「岩宿遺跡出土品」（指定344）29点を出品しました。岩宿遺跡出土石器が海外で展示されるのは初めてのことで。

石壯里博物館は石壯里遺跡の所在地に設置された博物館です。石壯里遺跡とは、1964年に韓国で初めて発掘された旧石器時代遺跡です。群馬県岩宿遺跡も1949年と1950年に明治大学により発掘された日本で最初の旧石器時代遺跡です。遺跡は国指定史跡であり、その所在地にはみどり市岩宿博物館が設置されています。両遺跡は、両国の旧石器時代（今から約15,000年前よりも古い時代）の考古学において研究の端緒となった記念碑的遺跡であり、共通した歴史的意義とその後の歩みを辿ったといえます。今回の特別展は、日韓の研究交流を促進するとともに、石壯里遺跡と岩宿遺跡を比較しながら分かりやすく展示することで韓国民に両遺跡の重要性を広くアピールすることを目的としています。

2012年に公州市とみどり市は、旧石器時代の考古学を中心とする文化交流に関する協定書を締結しました。その文化交流事業の第一弾として特別展「日本旧石器のはじまり“岩宿”」が企画されました。特別展の会期は2013年7月15日～2014年2月2日で、重要文化財29点の展示は9月半ばまでになります（以降はレプリカを展示）。展示では、岩宿遺跡の石器29点、岩宿遺跡発掘の記録類15点その他写真、岩宿遺跡周辺の関連遺跡出土品71点を展示しています。

今回の重要文化財の海外輸出は、石壯里博物館からの要請に基づき、文化庁の承認を得て実現しました。重要文化財の運搬は美術品梱包業者が行い、岩宿博物館と明治大学博物館のスタッフが同行して現地での展示作業を行いました。7月15日に石壯里博物館で行われた開幕式典には、日本側から尾崎享子氏（みどり市教育長）、石原亨夫氏（みどり市文化財課長）、小菅将夫氏（岩宿博物館長）、安森政雄氏（明治大学文学部教授）、風間信隆氏（明治大学博物館長）、島田和高氏（明治大学博物館学芸員）が参列し、複製の石器を使ったテープカットも行われました。



石壯里博物館



展示風景



開幕式典での風間館長のスピーチ



展示開幕風景

日韓旧石器文化交流事業
石壯里博物館 2013年特別企画展

日本旧石器の始まり“岩宿”

- 会期：2013年7月15日～2014年2月2日
- 主催：韓国石壯里博物館・日本岩宿博物館・
日本明治大学博物館
- 主管：韓国石壯里博物館・日本岩宿博物館
- 石壯里博物館：韓国忠清南道公州市金碧路990

山陰の民窯と民藝運動

現在、当館の商品部門には約 4,500 点の資料が存在しますが、その中でもとりわけ陶磁器類の割合が多くを占めます。その多くは、経済産業大臣による伝統的工芸品指定を受けた大規模産地をはじめとする焼き物がほとんどです。しかし、細かく目を通すと山陰地方に限り、小規模な窯の陶製品がいくつも収集されているのが目につきます。これは当館の前身、商品陳列館が一般公開や地方物産品の収集を開始した 1960 年頃、2 度にわたり、山陰地方の小規模産地の陶製品を丹念に収集するといった活動があったためです。その背景には山陰地方に民窯が広範囲に分布する状況と昭和初期に起きた民藝運動の関わりが考えられます。

「民藝運動」とは、宗教哲学者であり美術評論家である柳宗悦が、1926 年、陶芸家の濱田庄司、河井寛次郎らとともに起こした運動です。柳は、無名の工人達が生み出した日用雑器にこそ用と美が一致した至高の美が存在すると考え、その真相を究明するために民藝運動を主導しました。この運動は日本人の美意識に多大なる影響を及ぼします。

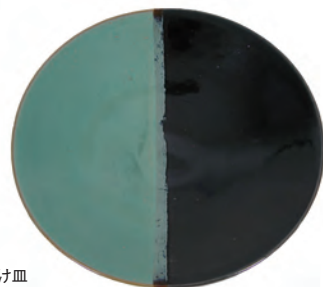
柳宗悦による「民芸品」の定義では、鑑賞よりも実用が重視され、広く一般民衆のために作られたものであること。そのため、反復利用に耐え得る堅牢性、過剰な装飾を施さない単純性を備えており、無名の職人により大量生産され、価格も廉価であること。また、反復作業により得られる熟練技術や伝統的な知識・手法が継承されていること。そして、そこから生まれる独特の美や健康性、地方性が指摘されています。

この考えに則り、柳らは地方に埋もれた民藝の美を求めて蒐集の旅に出で、全国各地を巡り、その土地の民芸品に出会い、その価値の再評価や指導を行いました。このような運動は、地方の無名職人達の精神的支柱となり、多くの伝統工芸の復興に一役買い、日本各地に多くの賛同者が生まれました。そういった中で、山陰地方は運動からいち早く、また、特別に影響を受けた地域でありました。

柳の定義では、山陰とは丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見の旧国 7 ヶ国という京都から島根の日本海側で、これに隠岐の島が加わります。大まかにいえば、現在の鳥取県と島根県です。柳宗悦は



布志名焼 皿



牛ノ戸焼 染分け皿

全国の民芸品探索の中で、山陰地方には 1931 年 5 月に初めて訪れており、同地ではその直後から早速、民藝運動が勃興し、柳もまたその後複数回にわたってこの地を訪れ、職人たちを熱心に指導しています。

そんな柳宗悦の著述の中で、健康的で美しく優れた雑器としてたびたび紹介されるものが島根県の出雲焼、鳥取県の牛ノ戸焼です。

まず、出雲焼とは、^{ふじな}（松江市玉湯町布志名）、湯町（松江市玉湯町湯町）、^{もり}（安来市伯太町）等の窯場でつくられる焼物の総称で、その中でも特に柳の眼を惹き付けたのが「^{きぐすり}黄釉」の焼き物です。ここでいう黄釉というのは鉛を成分とする釉薬で、西洋では大変多く用いられますが、日本ではまれであり、他の大部分の窯では黄色の発色には植物灰が用いられます。柳はこの鉛のものは白土の上かけると光沢のある鮮やかな黄が出るので、一見して特色ある焼き物と分かると述べ、その美しさを讃えています。

牛ノ戸焼については、新たな施策を試みる民窯の中で優れた作品をつくる窯として紹介しています。牛ノ戸焼はそれまで全く無名の雑器窯の一つでしたが、民藝運動に影響され、熱心に新しい道を模索しその名を広めていきました。その代表的な例がこの牛ノ戸焼の染分け皿です。黒と緑の釉薬を大胆に半分に塗り分けた「染分け」の手法は、広く鳥取地方の民藝運動の指導に当たった吉田璋也が考案したもので、この他にもここ牛ノ戸の窯では、柳や河井たちも指導・試作品製作にあたりました。

柳は山陰地方の優れた民窯の雑器や、そこにある「用の美」について多くの著書で述べ、それと同時に民窯の雑器が今後生き残る道を模索することの必要性を説きました。これに刺激される形でこの山陰の地では職人たちが民藝運動の思想に則り、盛んに試作を重ね、他の地にはない広範な民窯の活性化を見せました。その精神は現在まで脈々と受け継がれ、その様子は現在でも製品に見ることが出来ます。

（海塚有理）

【参考文献】

- ・柳 宗悦 1948 「手仕事の日本」 — (1954 編：日本民藝協会『柳宗悦選集 第二巻』)
- ・柳 宗悦 「雲石探美考」(1931 『大阪毎日新聞』鳥取版)、「日本民窯の現状」(1934 『工藝』第三十九号) — (1982 『柳宗悦全集 第十二巻』)
- ・外山 徹 2004 「生きた文化財・伝統的工芸品の継承に関する現状と課題」(『明治大学博物館研究報告 第9号』)



袖師焼 酒器セット



法勝寺焼 皿



左：湯町焼 ジョッキ 右：布志名焼 湯呑



ギロチンの解体と梱包



合同特別展会場（名古屋市博物館）

合同特別展

「驚きの博物館コレクション展！ 時を超え、世界を駆ける好奇心」

去る3月17日（日）に閉幕した南山大学人類学博物館・名古屋市博物館との合同特別展では、3館選りすぐりのコレクション1,629点（明大からは879点を出展）を公開し、合計37日間の会期に13,570名の方々にご来場いただきました。展覧会のテーマは博物館コレクションの形成。考古学、歴史学、民族学、日本美術等の分野にまたがり、大学による学術資料の収集のみならず、受贈した個人や企業のコレクションなど来歴としても多様なケースを取り上げ、博物館の収蔵資料群というものがどのような経緯で成り立ったのか理解を深める機会を提供することができました。展覧会場にお越しいただくことが出来なかった皆さまには、コレクションの来歴などを解説した展覧会図録を引き続き窓口で頒布（有償）しています。常設展示の資料がまた違って見えてくるのではないのでしょうか。

『博物館資料の再生 自明性への問いとコレクションの文化資源化』の刊行

2010・2011の両年度にわたり合計3回開催された博物館資料論をテーマとするシンポジウムの成果刊行物が、3月20日付で岩田書院から刊行されました。両館のコレクションについてより深い理解が得られるとともに、時代の移り変わり、人々の価値観の変化とともに博物館資料のあり方も常に変容し続けている、ということをご理解いただけるものと思います。博物館資料の定義を問い直す一冊です。

岩田書院 A5判 276ページ 定価¥2,800 + 税



図書室から

図書室からでは、博物館併設の図書室に関することをご紹介します。
今回は、図書ボランティアについてとりあげます。

博物館図書室では、2012年4月から、明治大学博物館友の会会員による博物館図書室管理員ボランティアとあわせて、学生ボランティアの活動を開始しました。

主な活動内容は、新着図書配架や、書架整備です。図書室では、利用した図書を御自身で元の場所に戻して頂くことになっているのですが、違う場所に戻される方も多く、書架が乱れやすくなっています。図書を正しい場所に戻し、利用しやすい図書室を維持するために、現在は2名の学生ボランティアが活躍中です。

学生ボランティアは随時募集しております。（大々的に募集するのは、春と秋の2回です。）

司書課程を受講されていらっしゃる方、図書館の仕事に興味のある方、これを読んでなんとなく気になった方！どなたでも出来る作業です。一緒により良い図書室を目指しましょう！

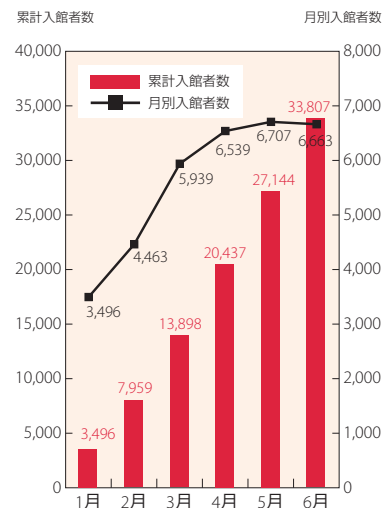
- ・活動時間：月曜日～金曜日 10：00～17：00
- ・活動条件：1週間に1回以上、1時間以上（授業の空き時間など、都合の良い時間に活動出来ます。）

博物館入館者数の動き (2013年1月～6月：延べ人数)

2004年4月以降の
総入館者数累計 **589,619人**

1月～6月	延べ人数
図書室利用者数	2,226
教室等利用者数	892

特別展来場者内訳		開催日数	来場者数
2/16～3/17	下郷コレクションと霞ヶ浦の貝塚	30日間	2,266
3/17～4/16	新収蔵・収蔵資料展 2013	23日間	1,625
4/20～5/1	建築家とは何か：堀口捨己・神代雄一郎の問い	30日間	2,767
5/25～6/30	オーソドックスな古文書展示	37日間	2,592
7/6～8/9	譜代大名内藤家文書の素顔	35日間	2,825



団体見学の記録 2013年1月～6月

【一般】

術科教養部 (12名) / 豊島区第3地区青少年育成委員会 (16名) / クラブツーリズム 気軽にそとあるき (10名) / はにわの館友の会 (15名) / 流山市立博物館 (30名) / 逗葉保護司会 (35名) / DANの会 (NPO エンジョイシニアライフ) (20名) / 飛騨考古学会 (5名) / クラブツーリズム 気軽にそとあるき (20名) / 鷹の台団地 元気会 (22名) / 中村国際刑事法律事務所 (3名) / ニ水会 (12名) / 朝日カルチャーセンター千葉 (17名) / 江戸散策の会 (16名) / NPO 東京都ウォーキング協会 (21名) / 商学部商学科昭和42年卒クラス会 (6名) / ふれあい大学24期てんてん会 (9名) / 史跡めぐりクラブ (さいたま市シニアユニバーシティ大宮校4期校友会) (20名) / 台湾政府法務省矯正局審議官一行 (13名) / さいたま市シニアユニバーシティ北浦和校第8期校友会 (27名) / いわき史学同好会 (38名) / 明渡会 (18名) / 厚木市生涯学習「輝き厚木塾」 (30名) / 未広会 (18名)

【小・中学校】

東京大学教育学部附属中等教育学校1年C組 (42名) / 自由の森学園中学校 (12名) / 川崎市立西高津中学校2年4組 (6名) / 三郷市立瑞穂中学校2年3組4班 (5名) / 三郷市立瑞穂中学校2年3組2班 (5名) / かつ有明中学校 (22名) / 成城中学校 (56名) / 府中市立府中第二中学校 (6名) / 青山学院中等部 (8名) / 盛岡市立土淵中学校3年生 (5名) / 岐阜市立岐阜中央中学校3年3組4班 (5名) / 横浜英和女学院中学高等学校 (6名) / 岡崎市立甲山中学校 (5名) / 小春学院 (8名)

【高等学校】

開星高等学校1年生 (4名) / 藤枝順心高等学校1年生 (6名) / 神奈川県立水取沢高等学校 (47名) / 都立一橋高等学校 (3名) / 山脇学園高等学校1年生 (80名) / 共愛学園高等学校2年生 (35名) / 千葉明德高等学校1年生 (84名) / 福島成蹊高等学校2・3年生 (19名) / 群馬県立前橋東高等学校1年生 (40名)

【大学・大学院・専門学校】

明治大学政治経済学部 水戸部ゼミ (16名) / 法政大学 法哲学演習 (15名) / 成城大学 刑事訴訟法ゼミ (20名) / 大原日本語学院 (21名)

M2 カタログ

「ニュルンベルクの鉄の処女 (アイアン・メイデン)」Tシャツ

これまで完売と再入荷を繰り返し、再び完売状態にあった「ニュルンベルクの鉄の処女 (アイアン・メイデン)」のTシャツですが、このたびデザインを一新して再入荷しました。

非道な拷問の象徴ともいうべき鉄の処女と共に、「NO MORE torture (拷問はもうたくさんだ)」のメッセージを掲げ、人権抑圧に反対する意思を示したTシャツです。これを着て、人権尊重をアピールしていただければ幸いです。



Mサイズのみ 1,000円

友の会新分科会

「倭国から大和」を学ぶ会が発足しました！

今年（2013年）9月に発足した新しい分科会です。発足したばかりですから、会員も長年この分野の勉強をして来た訳ではありません。入会を希望する方もこの対象分野に興味があれば、エキスパートである必要はありません。どなたでも歓迎致します。一緒に一から勉強をして行きましょう。

我々の会の研究対象は、北部九州で倭国の初代王位を確立した帥升の登場する2世紀初頭辺りから、倭国王に共立され、邪馬台国に居館を置いた卑弥呼、そしてその宗女の台与らが活躍する3世紀、更に現在の皇室に繋がる大和王権の基盤が確立する4世紀末頃までの時代の史実です。

4世紀は中国の史書に倭国に関する記述が全く無く「謎の4世紀」と云われています。しかし、弥生時代後期から古墳時代前期に相当するこの時代、我が国では青銅製が消滅し、大型前方後円墳が集中して出現、古代天皇制や古代国家が成立します。日本史の画期・分岐点になる劇的な変化が起きたのです。この時代の史実並びに、古代天皇制や古代国家が何故、どの様にして、4世紀末頃までに成立したのか等、歴史的事象とその背景

を観察するのが我々の趣旨です。史実の探求は残存している遺物や遺構から確認出来るものもありますが、いつ、誰が、どこを、どの様に統治していたのかという史実の究明は非常に困難です。それらについての記述や証明する文献が皆無あるいは限定されているからです。

我々の学習活動は毎月1回（第3木曜日午後）、博物館教室に集まり、メンバーが選定したテキストの精読を基本に進めます。併せて纏向遺跡などの現地踏査、博物館などの考古資料、後漢書、晋書、陳書などの文献の観察などを随時行い、更に民俗、伝承、哲学、宗教、文化とその伝播経路など、あらゆる入手可能な手段や情報・媒体を有効に利用し、洞察し、纏め、そして仮説と言える様な報告書を打ち出すことが究極の目標です。（K.O.）

【明治大学博物館友の会 連絡先】

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
明治大学博物館 友の会気付
メールアドレス meihakutomonokai@yahoo.co.jp
※博物館友の会の担当者は常駐しておりません。
連絡は必ずハガキまたはメールでお願いします。

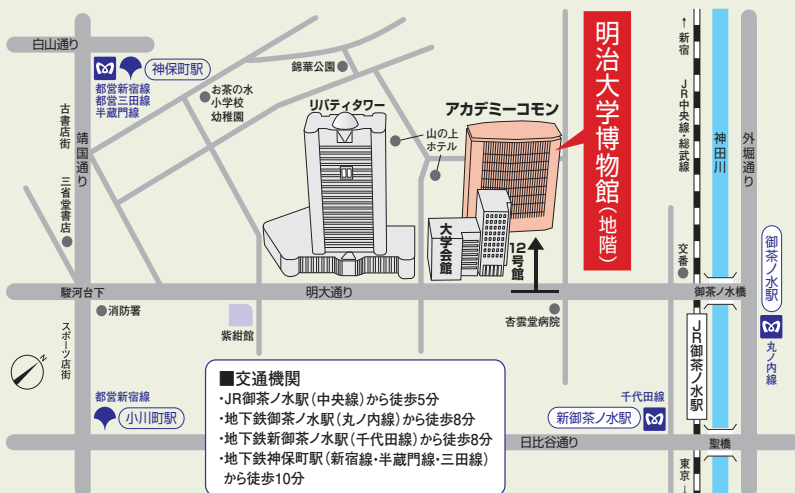
博物館案内

博物館案内

- ◆開館時間
10:00～17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日
夏季休業日(8/10～8/16)
冬季休業日(12/26～1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- ◆開室時間
月～土 10:00～16:30
- ◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
- ※図書室はどなたでもご利用いただけます。
- ※蔵書は閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



■交通機関
 ・JR御茶ノ水駅(中央線)から徒歩5分
 ・地下鉄御茶ノ水駅(丸ノ内線)から徒歩8分
 ・地下鉄新御茶ノ水駅(千代田線)から徒歩8分
 ・地下鉄神保町駅(新宿線・半蔵門線・三田線)から徒歩10分

編集後記

今回のミュージアム・アイズの特集は10月19日から開催の特別展「天平の華 東大寺と国分寺」です。3ページにわたって掲載していますので、特別展鑑賞のお供に最適です。食欲の秋も良いですが、今年は学問の秋として当館で天平文化にふれてみてはいかがでしょうか。